みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Economic Lives of Peasantry in Cameroon-Highland

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2010-02-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 端, 信行
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004228

カメルーン高地農民の経済生活
——その変容のメカニズム——

端　　信　行*

The Economic Lives of Peasantry in Cameroon-Highland

Nobuyuki HATA

The purpose of this article is to describe and analyse economic change of peasant society in rural Mankon in the Cameroon-Highland.

In this area, it is the principal characteristic that cultivation of food crops depends on women's works with labour exchange system called ishie. Traditionally, man had another kind of side-job and developed several exchange institutions (called nchua) using traditional money. Now they are facing great changes as a result of the urban development of Bamenda.

In this study, I focused attention on the change of household structure as the method to analyse the mechanism of socio-economic change of peasant society. Recently, the traditional roles of men and women have been changing and the household structure has developed a variety of types. Some of these are listed as follows:

Types of male occupation

(1) full-time farmer; new agriculturist. They produce cash crops, mainly vegetables and yams, and some of them try to introduce new agricultural techniques, that is irrigation, using medicines etc.

(2) urban worker; salaried occupations. Sometimes, they are week-end farmers.

(3) part-time farmer; they are traditional villagers. Most of them have some kind of side-job to get cash, such as trader, butcher,

* 国立民族学博物館第3研究部

Key Words: Cameroon-Highland, Mankon (Widekum), peasant society, household structure, socio-economic change

キーワード：カメルーン高地，マンコン（ウィデクム族），農民社会，世帯構造，社会・経済的変化

carpenter, wine tapper, stone cutter, sand collector, etc.

Types of female occupation

(4) house wife; not engaged in agriculture. These are a minority. In most cases they are wives of salaried people.

(5) traditional wife; full-time farmer. They produce staple-food crops, mainly taro, macabo, manioc, maize, etc. Sometimes they sell these crops in the markets.

Of course, the majority of household structures in Mankon consist of the combination of (3)+(5). They have the function of the neutral stratum to soften the radical change of the society. On the other hand it is important for the further analysis of the mechanism of socio-economic change of peasant society that we can recognize another types of household structure, that is (2)+(4) or (1)+(5), (2)+(5).

はじめに
第1章　カメルーン高地
　カメルーン高地の概観
　カメルーン高地と王制社会
第2章　マンコン社会の農民経済
　バメンダとマンコン
　マンコンにおける農業生産の形態
第3章　農民層の生業分化
　伝統的な男女間の分業
　農民層の生業分化
　女性の農業労働
第4章　交換の諸体系
　交換の種類
　労働の交換
　ンチュア組織における交換の意味
むすびにかえて

はじめに

カメルーン高地は，いくつかの文化的特色によってながく民族学者の関心をひいてきた地域である。神聖なる王をいただく王制社会とその政治制度の特色。王権や宗教的観念とむすびついたさまざまな象徴や物質文化。とくに彫像や仮面はカメルーン高地様式とでもいうべき造形的特徴をもつことで知られている。言語的にもバンツー系諸族のなかのマクロ・バンツー（Macro-Bantu）に分類され，いわば Bantu 祖語に位置づけられている。G. P. マードックはカメルーン高地を，今日では赤道以南のアフリカにひろく分布するバンツー系民族の起源地とみなした [Murdock 1959]。

本稿はこのような文化的特色をもつカメルーン高地民の経済生活を記述し分析しよ

うとするものである。そのきわだった文化的特色にくらべて焼畑農耕を基盤とする経済生活はあまり民族学者の関心をひかなかったようで，これまでの民族誌においてもそれらはいわば文化の下部構造として簡単にふれられているにすぎない [CHILVER and KABERRY 1968]。

筆者はこうしたカメルーン高地農民の経済生活やその背景となる文化的事象との関連性をあきらかにするために，1978年以来，マンコン（Mankon）社会を中心に調査をつづけてきた。その文化的特色と経済生活とのあいだにどのような関係があるのかが一貫してかわらぬ関心であった。

筆者はかつてカメルーン北中部の焼畑農耕民の調査をしたことがあった [端 1976, 1978, 1980a]。そこでは首長こそ認められてはいたが，それは伝統的な制度ではなくフランスによる植民地化の過程においてもたらされたものであって，人々の経済生活とふかくかかわるようなことはなかった。そこには自律的な焼畑農民の姿があったのである。しかしカメルーン高地農民の社会においては，焼畑農耕という生産様式が王制のような明確な中枢的権威をもつ社会を成り立たせるのにどういう原理がはたらいているのか，という関心が頭からはなれることはなかったことも事実である。

王制と焼畑農耕。一見してあまりかかわりがなさそうに思われるこのふたつの概念は，アフリカ社会の研究においてはきわめて重要な意味をもつ。アフリカにおける社会・政治制度の研究においては，かねてより中枢的権威をもった王制国家が知られていたが，生産様式とのかかわりにおいてその成立のメカニズムはいまだ十分な分析をみない。

さらに重要な点は，カメルーン高地農民にしろ他のアフリカの農民社会にしろ，その経済生活の変化が著しいということである。急速な経済生活の変容は社会や文化にどのような影響をおよぼしているのであろうか。たとえば王制という問題をめぐっては，かつてのような自給的な農民経済のもとでの王制と現代の王制とでは，王制そのものも変化していると考えねばならない。王制と焼畑農耕との関係も時系列に沿って分析されねばならないことはいうまでもない。

本稿においては，まずカメルーン高地農民の経済生活の変容のメカニズムを明らかにすることにしたい。農民の生業のあり方，生業の単位としての世帯の変容，さらにはそうした世帯を結びつけている交換の諸形態の変容を明らかにし，この社会における変容のメカニズムをまず農民の経済生活から分析しておく。

しかるのち稿をあらためて，農民の経済生活と社会形態，とくに王制とのかかわりについて分析することにしたい。王制そのものの変化について考えるためには，農民

の経済生活の変化についてふれおくことが順序だと考えるからである。

第1章　カメルーン高地

カメルーン高地の概観

一般にカメルーン高地とよばれている地域は，ナイジェリアとの国境にちかいカメルーン共和国西部の高地をさす。高地部の高度は海抜800メートルから1400メートルにおよび，その平均高度は1000メートルをこす。高地の景観は準平原状で，侵食のすすんだゆるやかな丘陵がつらなっている。ひとつひとつの丘陵のすそをぬうように小さな流れがきざまれている。高地を流れる無数の小流の水源は地下水の湧出であり，その流れは乾期においても涸れることはない[1]。この高地の北西部一帯はナイジェリア南東部の低地を流れるベヌエ（Benue）川の支流カティナ・アラ（Katsina Ala）川やクロス（Cross）川の水源地帯でもある。

この高地の丘陵の植生は，現在はエレファントグラスを主とするイネ科の草本でおおわれており，それは海抜1000メートル以上でとりわけ著しい。海抜高度800メートル以下の谷がきざんだ低地や水流にそった河辺林をのぞけば，この高地は一面の草地でおおわれているのである。このためこの高地は，20世紀初頭にドイツの研究者がはじめて調査をおこなったときから，グラスフィールドとかグラスランドとよびならわされてきた[2]。

この高地における現在の一般的な生産形態は，雑穀類あるいはイモ類を主作物とする焼畑農耕である。雑穀類ではトウジンビエ，モロコシ，トウモロコシなどが作付けされている。イモ類ではヤムイモ，タロイモ，マカボが中心である。これらの作物は，基本的に丘陵の草地で栽培される。したがってカメルーン高地の焼畑は，その休閑期間を草地植生に依存した焼畑農耕であり，草地休閑型に属するといえる形態である。この休閑形態についてはすでに報告しているので，それを参照されたい [端　1993]。

しかしこのような草地休閑型の焼畑農耕のみがこの高地の生産形態ではない。農耕ということではイモ類や雑穀類のあとに植え付けるマニオクや屋敷地内の畑に植え付けるプランテインが重要である。また今日では貨幣経済が一般的であるため，農民に

1)　前カメルーン国立人文科学研究所バメンダ支所長の Soh 氏は，カメルーン高地における居住を考えるうえで，地下水の湧出はとくに重要な意味をもつと指摘した。
2)　たとえば最近では Nkwi, P. N. の著作 [1987] などがある。

とって換金作物はきわめて重要になりつつあるが，この地方ではコーヒーがその代表的な作物となっている。またこの高地ではさまざまな儀礼の場にはラフィアヤシから採取したヤシ酒が欠かせないが，そのラフィアヤシも栽培されているので，やはり作物のなかにふくまれるであろう。

また農民はその屋敷地内に必ずといってよいほどブタやニワトリを飼っている。ブタは屋敷地内の畑のなかに棒杭で囲いをして，1頭ないし2頭飼っている。この高地の農耕民はウシを飼ってはいないが，高地のところどころにはフルベ牧畜民の居住がみられ，彼らはウシを保有し丘陵部で放牧している。

またこの高地の農耕民にとっては，かつては狩猟は重要な生業であったようである。というのも，のちにくわしく述べるが，うえに概観したようなこの高地の農耕は明確に女性の仕事とされており，ずっと以前は男性は狩猟に出かけていたといわれている。そのことはこの高地のいくつかの社会で現在もおこなわれている狩猟儀礼から推察できるし，またそのような伝承も多く残されている [Kodjo n.d.]。このことは本論の展開と直接関係はないが，この高地におけるかつての狩猟の方法は，現在も中央アフリカの一部の狩猟民がおこなっているネットハンティングに類似したものである。アフリカ文化史における焼畑農耕と狩猟との関係を考えるうえで興味深い事例である。

カメルーン高地と王制社会

ここでこの地方に居住する焼畑農耕民の民族学的特徴を概観しておきたい。

カメルーン高地における農民社会のもっとも大きな特徴はその王制度にあるといえる。王はフォ（Fo, For）あるいはフォン（Fon）とよばれ，社会の文化的，政治的，精神的統合を一身に具現している存在である。たとえば王の一般的な性格としてその神性が挙げられる。カメルーン高地民の社会においては祖先崇拝の観念が一般的で，社会組織の原理はクラン，リネジ制である。社会の大小にかかわらずフォないしフォンとよばれる王は，いくつかの超能力をもつと考えられているが，そのひとつは祖先のカミと交信する能力である。それゆえに王はただのヒトではなく，祖先のカミの意志をたしかめることのできる唯一の存在である [Chilver and Kaberry 1968]。一般の人々は，こうした神性をもつ王には触れることはできない，王と話すときには両手で口を覆い口の動きを隠さなければならない，遠くから王の姿をみたときには2度柏手を打つなど，王にまつわるタブーがたくさんある。

王の存在そのものについてもさまざまなタブーがあり，たとえば王の身体を表現するときには一般名詞を使わないとされている。王の目のことがいいたいときは王の星

と表現する。このたぐいの用例がいくつかみられる。また王はものを食べないと信じられている。王に背中をさわってもらうと幸福になるともいわれている。このようなカメルーン高地民の王は明らかに神性をもったカミなる王（Divine King）の定義にかなう性格を有しているといえる。

カメルーン高地には王制社会がどれほどあるのだろうか。正確な統計があるわけではないが，およそ100ちかくある。その社会の規模はさまざまで小さい例では集落が数カ所でひとつの王制の単位になっているところがある。逆に大きい例では人口にして数十万の規模の王国もある [Chilver and Kaberry　1968]。

こうしたカメルーン高地の王制社会に対して，いくつかの民族誌は Village Kingdom という概念を適用している[3]。日本語に訳せば村落王国とか村落国家ということになろうか。この概念はおそらく行政レベルのタームが背景になっていると思われる。というのはここでいう Village そのものが，植民地行政の枠組みから生まれているからである。

現在の時点（1992年）からふりかえってみてもこの構造は基本的に同じであると考えてよいであろう。すなわち現在のカメルーン共和国の枠組みでいうと，これまで述べてきたカメルーン高地地方は行政区画としてはほぼ西部州と北西部州とに含まれている。このうち西部州は民族的にはバミレケ（Bamileke）族とバムン（Bamun）族の範域によって占められている。これに対して北西部州は民族的にはティカール（Tikar）族やウィデクム（Widekum）族から構成されているが，政治・社会的にはすでに述べたような数多くの小さな王制社会が分立しているのである。そこでこの北西部州ではその下部の行政単位である District のなかにいくつかの王制社会が含まれるという構造になり，そのときそれぞれの王制社会がしばしば Village の概念で位置づけられるのである。

おなじカメルーン高地でも西部州と北西部州とでその社会形態が大きく異なっている。西部州域を占めるバミレケ社会とバムン社会はいずれもフォンをいただく王制社会である。そのフォンの性格はすでに述べた北西部州の王の性格とほとんど変わるところがない。バミレケ社会もバムン社会もかつてはティカール族やウィデクム族の社会とおなじように小さな王制が分立していたと考えられる。それがバムン社会の場合は18世紀ごろに出た11代目の王が分立していた小さな王制を併合して民族的統合を成し遂げたといわれている。統合されたクラン制に基づく旧王制組織はそのまま地域組織として機能していることが知られている [和崎　1980]。このような事情はバミレケ

3）たとえば Ritzenthaler, R. and P. の著作 [1962] がある。

社会についても同様である。その場合の民族的統合をとげた王はParamount Chiefのタームでよばれている [MURDOCK　1959]。

これに対して北西部州域においては王制社会のパラマウント化は民族的統合というところまでは進展しなかったといえる。その理由はわからない。北西部州域の王制社会をこまかく検討すれば，いくつかの社会においては小規模の王制の統合があった。しかしそれはいくつかのクラン組織を統合した程度にとどまっており，民族的統合のレベルまで達しなかったのである。

このようにみていけば，カメルーン高地における王制の原型は祖先崇拝の観念と結びついたクラン制組織に存在することは明らかである [WARNIER　1975]。したがって論理的に王の原型はクラン組織の長にみられることになる。この点はカメルーン高地における農民の経済活動の源泉とふかくかかわる点であると思われる。

第2章　マンコン社会の農民経済

バメンダとマンコン

カメルーン共和国北西部州の州都はバメンダ（Bamenda）である。州庁をはじめ国の行政機関が集中し，なおかつ北西部州全域の物産の集散がおこなわれ，州の経済活動の中心でもある。バメンダの街の中心には各種商店やおもな銀行の支店がならび，まさしく地方中心都市として機能している。

このバメンダが都市としての成長をはじめるのは，20世紀のはじめにドイツが軍事駐屯地を設営して以後のことである。記録によれば，その当時は現在の街の中心部にちかいところにわずかにハウサ商人が住み着いていたという [SOH　1983]。現在は人口約5万の都市に成長している。

小さな王制社会が分立するカメルーン高地において，どのような社会空間にバメンダの都市形成がみられたのか，これはひとつの興味深い問題である。いまこの問題に深入りする余裕はないので，ここでは結論的に述べておくことにする。

現在のバメンダの都市空間をみると，あたかもいくつかの王制社会の境界が重なりあった位置にひろがっている。具体的に述べれば，マンコン（Mankon）をはじめ，ンクェン（Nkwen），メンダンクェ（Menda Nkwe），アクム（Akum），ンバトゥ（Nbatu）などの王制社会の境界が接している位置にバメンダが発達しているのである。バメンダの都市としての発展の契機となったドイツの軍事駐屯地の建物の一部は

現在も使われており，その位置はメンダンクェの領域にある。その当時のハウサ商人の居住位置はマンコンの領域に属していたことがはっきりしている。現在のバメンダの中心街に近いその街区にはいまもハウサ商人が居住しており，街区の地名にもハウサの名称が使われている。またバメンダに住むハウサ族はさまざまな祝祭の機会にはマンコンの王宮を訪れ，マンコン王に祝意をあらわす慣習が現在もつづけられている。これは明らかにマンコンの領域内にハウサ商人が居住を許されていた関係を示している。

このようなバメンダ形成期の事例をみると，カメルーン高地に分立していた王制社会と外部世界からの侵入者とがどのような関係にあったかが明らかとなる。すなわちバメンダの都市形成は，王制社会の社会空間においては周縁的世界の現象として位置づけられていたのである。

しかしながらこれはあくまでも初期的現象であったといわねばならない。はじまりの時代から1世紀ちかくをへた今日，都市バメンダのもつ社会的影響力は計り知れないほど大きくなった。分立する王制社会の周縁的空間に生まれたバメンダは，今日では文化的，社会的，経済的，政治的に大きな影響力を王制社会に対してもつにいたったのである。そしてバメンダの影響力をもっとも強くうけているのが，その中心街区が発達したマンコン王制社会である。

したがってマンコン王制社会は，基本的には焼畑農耕に依存する農民社会でありながら，いっぽうではその領域にカメルーン高地で最大の人口5万の都市を内包していることになる。ちなみにはじめて軍事駐屯地がおかれたメンダンクェの側には，行政機関がいくつかおかれているものの都市的発達はみられなかった。都市的発達は主としてマンコンの側においてみられたのである。しかし近年ではさらに都市化がすすむ傾向がみられ，バメンダの居住区域はンクェンやアクムなど他の王制社会の領域に拡大しつつある。

マンコンにおける農業生産の形態

本報告で事例としてとりあげるマンコン社会は，すでに明らかなように，基本的には焼畑農耕に依存する農民社会でありながら，いっぽうではカメルーン高地最大の人口5万の都市を内包しているところに特色がある。

したがってマンコンにおける農業生産に対する都市の影響には大きいものがあるといわざるをえない。しかしその影響というのは農業生産のどのような局面におよぶのであろうか。また都市の存在は農耕の技術的側面に対してはどのような影響をおよぼ

すのであろうか。たとえば作物の作付けの量的な面では都市の影響は大きい。また都市を市場とした新しい作物の導入もみられる。マンコンの農耕の特徴についてはこれまでも報告してきたところであるが [端　1986, 1993]，ここでは農業生産の形態の視点から述べることにしたい[4]。

作物の構成　まず作物の面からみれば，マンコンの場合は根菜類が中心である。自給的主食作物としては，マカボおよびタロイモが中心で，これに補助的にマニオク，ヤムイモ，プランテインがくわわる。トウモロコシをはじめとする雑穀類の栽培はほとんどみられない。その意味においてはマンコンの農耕は根菜型といえるものである。

これに対して多年生の樹木作物であるコーヒーおよびラフィアヤシの栽培もマンコンでは一般的である。コーヒーは農民の主要な換金作物として，またラフィアヤシは生活に欠かせないヤシ酒を採取する資源として栽培されている。

このほか一部の農民のあいだでしかみられないのであるが，トマト，タマネギ，キャベツなどの野菜栽培の例がみられる。これらはいうまでもなく換金作物として都市に出荷することを目的に栽培されているのである。

こうした作物栽培以外では，マンコンではブタ，ヤギ，ニワトリといった家畜・家禽飼育も一般的である[5]。

生産の場　次にこれらの作物が栽培される場や家畜が飼育される場についてみておく。

マンコンにおいては作物によって生産される空間が明確に異なる。すなわちマカボやタロイモのような主食作物をはじめ補助的な作物であるマニオクは草地におおわれた丘陵の斜面の焼畑で栽培される。新しく草地を開墾して造成された焼畑にはまず初年目作物としてマカボとタロイモが植え付けられる。マカボ，タロイモが収穫されたあと，2年目には通常マニオクが植えられる。マニオクが収穫されてしまうとその畑地は放棄され，休閑にはいる。この草地休閑形式の焼畑についてはすでにくわしく報告した [端　1993]。

これに対して補助作物のプランテインや換金作物のコーヒー，そしてヤシ酒を採取するラフィアヤシ，ブタやニトリなどの家畜の生産の場は屋敷地内の農地である。図

4)　個々の作物の科学名，民俗名などは，繁雑さをさけるためここでは省略した。端 [1993] を参照されたい。

5)　マンコンの農民がブタ，ヤギ，ニワトリを日常的に食することはない。これらの家畜，家禽類は埋葬儀礼のようなきわめて重要な儀礼のときに，供食用として食される。

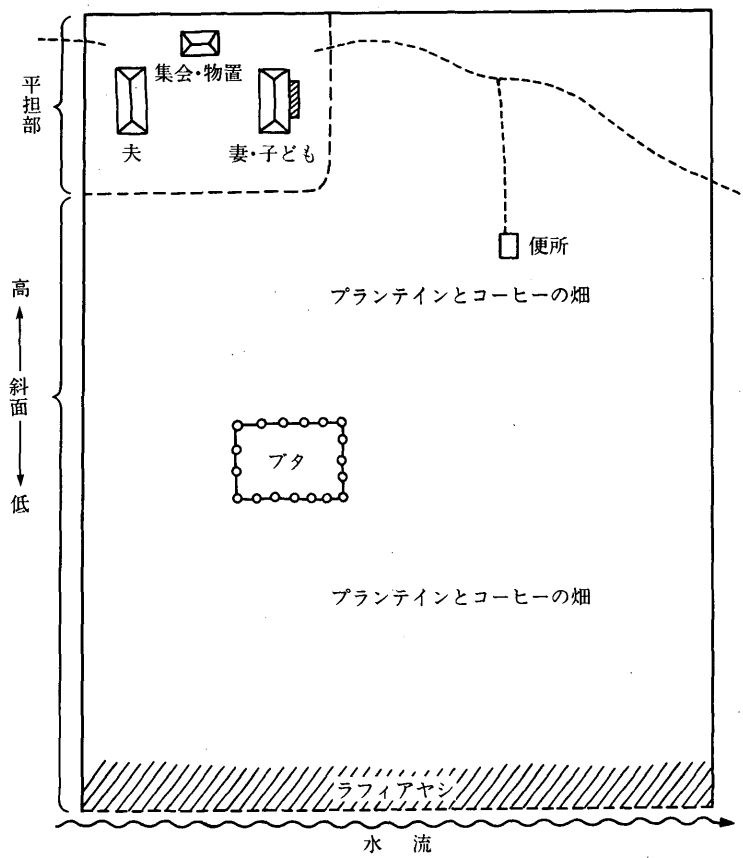


図1　屋敷地の模式図

1はマンコンの農民の屋敷地の模式図である。この図からわかるように，屋敷地は一般には丘陵の低部を利用してもうけられている。住居は屋敷地の上部につくられており，その部分は平坦にならされている。屋敷地の斜面はほとんどプランテインとコーヒーの畑となっている。そのなかにブタを囲っておく柵がつくられていることが多い。ラフィアヤシは最低部の水流にそって植えられており，河辺林をなしている。

このようにマンコンにおける農業的生産の場は大きくふたつの空間から構成されている。草地の丘陵に造成された焼畑と屋敷地内の畑とである。しかしはじめに述べた作物のうち，単純にこのふたつの畑地のどちらかに分類できない作物がある。それは野菜とヤムイモとである。これらは屋敷地内での栽培例をみることもあり，また丘陵の畑地でつくられる例もある。このちがいを生み出しているのは栽培量の問題である。というのは野菜にしろヤムイモにしろ，屋敷地内の畑地でつくられている例は明らか

に自給用と思われる程度の量の栽培しかみられない。これに対して，丘陵の畑地で栽培されている例では，それらは大量につくられておりまさしく換金用に栽培されているのである。

この現象と関係する作物はマニオクである。マニオクは屋敷地内でつくられることはなく，すべて丘陵の焼畑で栽培される。近年の傾向としてマニオクの作付けが増えていることが指摘できる。あくまでもマニオクは2年目作物であるが，タロイモやマカボを収穫したあとウネをつくりかえ，同時に面積を増やしてマニオクを作付けする例がみられる。これもマニオクがたんに補助的作物にとどまらず，なかば商品化しつつあるという現実があるからである。

上述の事例のなかに都市の影響が明確にあらわれているといえよう。第1は都市の市場性である。都市は大きな食料市場であり，その供給を周辺の農村に依存する。マンコンの事例は周辺農村の生産形態の変化のメカニズムを明確に示していると考えられる。すなわちそれは補助的作物の大量生産化である。これまでの調査の例をみても，自給的主食作物の大量生産化はみられない。それはおそらく何か阻害するメカニズムが働くということであろう。

都市の影響の第2は，野菜の大量生産にみられるように，それまでその社会がもたなかった新しい作物の導入である。その作物は村内で消費するのではないから，もちろん都市の市場性を前提にしているのであるが，あくまでも新しい作物をもたらしたことに意味がある。村内で消費しない新しい作物といえば，コーヒーもそれにあたる。いまは換金作物としてその栽培が定着しているのであるが，コーヒーは都市バメンダの市場性に影響されてひろまったわけではない点が野菜とは区別される。

農作物の商品化　ここでマンコンの農民が生産する農作物の商品化にふれておく。まず主食作物のマカボとタロイモはほとんど商品化されない。都市バメンダには常設の市場があり毎日ひらかれている。土曜日は周辺の農村から人々が集まり大いににぎわう。その市場においてもマカボやタロイモをみることは少ない。

これには文化的問題が含まれているのかも知れない。というのはこのマカボとタロイモの食べ方の問題があるからである。すでに報告したことがあるが [端　1982]，マンコンとその周辺の人々はマカボとタロイモを煮込んだうえ，それを木製の舟形のウスでついてモチ状にする。これをアチュウ（achuu）とよんで，このイモのモチをソースで味付けをしながら食するのである。カメルーン高地の人々がすべてこの食べ方をするわけではなく，まして他の地方の人々はアチュウを食べない。したがってマカボ

とタロイモの市場性はバメンダの人口に直結しないのである。

補助作物であるマニオク，ヤムイモ，プランテインはいずれもなかば商品作物化しており，さまざまな機会を通じて販売される。このうちマニオクは，イモそのままではなく，おろしがねを用いてすりおろしたのち，それを袋詰めにして重石やてこを利用してあく抜きをおこない，とりだしたデンプンを乾燥させ粉末状にする。この地方では最後の工程でヤシ油を加えることが多い。いずれにせよマニオクはこうして加工しなければ商品価値がない。

これに対してプランテインやヤムイモはそのまま商品となる。このふたつは形はちがうけれども，その食べ方はよく似ている。いずれも煮込むだけの料理法である。プランテインは皮をむかねばならないし，ヤムイモはスライスしなければならないが，煮て食べるという方法はカメルーン高地地方では共通している。

すでに述べたようにマンコンの農民が換金作物として栽培しているのはコーヒーである。コーヒーは完全な商品作物といえる。またすべての農民が栽培しているわけではないが，同じく換金作物として近年では野菜類の栽培がみられる。

さらにここでふれておかなければならないのはラフィアヤシについてである。マンコンの農民は屋敷地に栽培しているラフィアヤシから毎日ヤシ酒を採取する習慣がある。このヤシ酒は訪ねてきた人にふるまったり，王に面会を求めるときや，あとで述べる労働交換や集会のときにふるまうなど，さまざまな場面で必要となる。それはあくまでも社会的に欠かせないものと考えられてきた。

ところが近年では都市の住民が安価な酒としてヤシ酒を求めはじめたことから，マンコンの農民のなかにはヤシ酒を都市へ売りにゆく者がでてきているのである。すなわちヤシ酒は社会的必要ということで自給が原則であったのが，都市という市場が生まれなかば商品化しつつあるのである。

これらをまとめると次のようになる。

(a) 自給作物：マカボ，タロイモ

(b) 半商品作物：マニオク，ヤムイモ，プランテイン，ラフィアヤシ

(c) 商品作物：コーヒー，野菜

そして主としてこれらの自給的作物の商品化や商品作物の導入をめぐって，マンコン農民の生業分化が起こっているのである。次章においてこの問題を展開する。

第3章　農民層の生業分化

伝統的な男女間の分業

これまで第2章で述べてきた，マンコンにおける農業生産の形態のなかに男女間の明確な分業が存在する。それは主として生産の場所とかかわっている。すなわち草地におおわれた丘陵で焼畑を造成しそこで主食作物であるマカボやタロイモを生産するのは，伝統的に女性の仕事である[6]。

この地方で農具といえば手ぐわがその代表である。あとは農具らしいものはほとんどない。この手ぐわで女性は丘陵の草地を開墾し，ウネをつくる。この地方で畑にゆく女性に会うとかならず頭にこの手ぐわをのせている。イモを収穫したときには，頭上のカゴいっぱいにイモを入れそのうえに手ぐわがのせられている。手ぐわは女性の象徴ともなっており，男性がくわを手にすると女性のようだと表現したり，男性はくわを手にしてはならないといったりするほどである。

マンコンでは，1人の成人女性は焼畑を6筆から10筆経営しているのが一般的である。主食となるマカボやタロイモは焼畑の初年目作物であるから，畑地は毎年新しく開墾していなければならない。マカボやタロイモは1度に収穫しないので，初年目の畑といっても期間的には少しずつずれてくる。したがって1人の女性のある時点をとれば，開墾中の畑，収穫のできる畑，収穫も終わりにちかい畑，そして2年目の畑などさまざまな段階の畑が経営されていることになる。

こうした畑は休閑期間との関係もあって，同一の場所に集中して造成されることはなく，マンコン領内のほうぼうの丘陵斜面につくられている。したがって女性はあちらこちらの畑に出かけていくことになる。マンコンの主食作物の生産は女性労働に依存しているのである。

これに対して男性は屋敷地内の畑地の管理が仕事である。屋敷地内の畑地といえば，植えられている作物はコーヒーとプランテインであり，ヤシ酒をとるためのラフィアヤシである。いずれも多年生の樹木作物であり，農作業といえば除草と収穫ぐらいである。労働量からみれば分業というのも不自然なほど女性の仕事とは不均衡である。

生産の場所という労働空間の分業としてみれば伝統的には以上のようであったが，

6）これはカメルーン高地一帯の特色でもあり，カメルーン高地社会の女性の役割の明確さは民族学的関心をひくものである。たとえば，Kaberry, P. M. の著作 [1952] がある。

近年，屋敷地内にとどまらず丘陵部の畑地において農業を展開する男性が出現しはじめている。その場合は作物が限定されていることが注目される。彼らはけっしてマカボやタロイモといった主食作物を栽培せず，元来は補助作物であったヤムイモ，ときにはマニオク，そして商品作物の野菜を栽培している。

このように屋敷地内での作物はコーヒーであり，男性が大量生産に取り組むのが野菜であり，またヤムイモであるということは，つまり男性が管理する農産物は商品的作物だということである。したがって男女間の分業の原理は，丘陵の焼畑か屋敷内の畑地かではなくて，自給用の主食作物か商品作物かということになる。しかしこの原理はきわめて現代的であって，商品作物が導入される以前の伝統的な分業形態とどのようにつながるのであろうか。

村の長老の語るところでは，丘陵での焼畑でマカボやタロイモを栽培していたのは昔から女性の役割であったという。現代化する以前の男性の仕事といえば，ヤシ酒を採取すること，王の宮殿を中心とした社会的・政治的行事に参加すること，ときどき狩猟をおこない野獣の肉を手にいれること，そして隣国との争いや戦争に加わること，身近なところでは住居をつくることなどであったという。

20世紀にはいり植民地行政が浸透するにつれ，何事にも通貨が必要となる事態になったという。もっとも具体的なのは人頭税であった。そしていっぽうではコーヒー栽培がすすめられ，それをもって通貨を得る手段とする政策がとられたのであった。この頃から通貨つまり現金を得るのが男性の仕事という方向に変化してきたという。したがって今日的にいえば，マンコン社会の男女間の分業は自給用の主食を栽培するのが女性の仕事であり，男性は現金を得るのが仕事という考え方になっている。

農民層の生業分化

このような歴史的過程をへて，マンコンの農民層は新たなる生業を求めて分化しはじめている。とりわけ男性は現金を獲得する役割を担っており，そのことが生業分化の大きな原動力となっていることは否定できない。たとえば現金を得るもっとも確実な手段はサラリーをとれる職種につくことである。マンコンにはそのような職種はないが，州都バメンダには行政機関がたくさんある。上級の学校に進学すると，そのような職種につきやすくなる。カメルーンでは独立以来学校制度はよく整備されてきたので，人々の進学希望は年々高まっている。そしてつてを頼ったりしながらサラリーをとる職について，毎日バメンダへ通勤している男性が出はじめているのである。

また人数はさほど多くないが，いく人かの男性が農業を専業としはじめている。す

でに明らかなようにマンコンの伝統的な生活様式では農耕は基本的に女性が担っていた。男性は伝統的には農耕にたずさわらなかった。しかし貨幣経済化がすすむなかで，現金を得る手段のひとつとして商品作物を中心とする農業を生業とする男性が出はじめてきたのである。その栽培作物は野菜でありヤムイモであった。これは市場としての都市を前提にした専業農業者の成立である。

以上のふたつの分野はマンコンの男性の現金獲得手段のなかで特に生業として目立った分野であった。このふたつの分野にふくまれない大部分の男性はどのような手段を講じて貨幣経済に適応しようとしているのであろうか。

すでに述べたように，マンコンの一般の男性は少なくともそれぞれの屋敷地内にコーヒーの畑をもっているので，毎年の乾期に豆を収穫しバメンダにある協同組合に買い取ってもらえば最低限の現金は得ることができる。しかしそれだけでは十分でないという。もちろんこの背景には近年のコーヒーの国際市場での価格の暴落がある。こうした男性たちはいろいろな仕事に手を染めている。

それはとても一定のカテゴリーでは処理できないほど広範囲の仕事にわたっており，さらにはその仕事の定時性や収入の量における安定性は把握できないほどであった。聞き取ったままにそれらのいくつかを挙げておく。

現在マンコンの男性が従事している仕事に砂の採取と砂利づくりとがある。マンコン領の中央をメザム（Mezam）川が流れているが，その流れの所々で砂の採取がおこなわれている。これはおもに若者が従事しているが，バケツのような器をもち流れのなかに潜って川底の砂をすくいとるのである。採取した砂は川岸に積み上げられる。一定の量にたっするとバメンダからトラックがきて業者がそれを買い取るのである。村の男性のなかには仲買をする者までいる。すなわち砂を採取する者が現金を必要としていると，採取された砂をその場で買い取りそののち都市の業者に売るのである[7]。

砂利づくりも原理は同じである。これは道路沿いによくみられる光景である。この地方では河川からは砂は採取できても砂利はとれない。そこで誰がはじめたか知らないが，露出した母岩をハンマーで細かく砕いて砂利をつくるのである[8]。どの岩でもよいのだが，あとで搬出の時に便利なので道路沿いの場所が選ばれる。とくに切り通しになっているところは，道路沿いの条件をみたしているので好まれるのだが，アフリカの交通事情を知る人には実に危険に思える仕事である。売る事情は砂の場合と同

7）川からの砂の採取は水量が減る乾期のあいだだけおこなわれる。小型トラック一杯の砂は1990年当時で2000～3000フランで買いとられた（1000フランは約500円に相当）。

8）砂利づくりはおもに雨期のあいだおこなわれる。1990年当時，トラック一杯が7000フランで買いとられていた。

じである。砂も砂利もいずれもがセメント建築に必要な資材であり，その市場があるかぎりこの仕事はなくならない。

カメルーン高地がナイジェリアと国境を接しているという条件もあって，マンコンの男性はナイジェリアとのあいだの交易に参入する。交易といえば聞こえはよいが，しばしば間道を利用した密輸まがいの仕事もある。現在ナイジェリアはアフリカで最大の工業国であり，また日本製品も数多く輸入されている。カメルーンは工業化は遅れているものの農業を中心とする経済は比較的安定しており，その通貨も安定している。そういった条件を生かして，ナイジェリアからさまざまな製品をカメルーンに持ち込むのである。バメンダはそうした一大市場でもある。

そのようにして小金の蓄財ができるとマンコンの男性は村内に店をかまえる傾向がある。店舗商人になるわけである。そこではジュースやビール，タバコ，調味料，ノートなどの雑貨が売られる。このような店舗はほとんど個人客で成り立っている。この10年ほどのあいだに村内人口はあまり変化がないにもかかわらず，店舗だけは筆者の知る地区だけでも2軒が5軒になったのである。

筆者の知人の1人はバメンダのある行政機関につとめるサラリーマンになったが，その小金をもとに家の近くに店舗を開き，2番目の妻をその店番にすえた。またある店舗を営む男性は，週に1度，20キロほど離れた村で開かれる市に，店の雑貨をもって参加している。

商業というものは小利を生むとみえて多くの男性がそれに参入している。もっとも手っとり早いのは，小金ができたときに商品を買い込み，ストックしておいて，緊急のときやまとまった需要が生じたときにそれを売るというものである。マンコンではこの方法で扱われるもっとも一般的な商品はビールである。10ダースのビールが1週間でなくなった例があった。ある者は牛肉を扱い，ある者は雑貨を扱い，またある者は布地を扱っている。彼らは商人になったわけではないが，かといって取扱い商品を簡単に変えたりはしない。それは職業といってもよいほど固定化された形態となっている。

このようにみてくると，もともと主食生産から開放されていたマンコンの男性は，浸透する貨幣経済化に適応するため，現金収入を確保するさまざまな手段を講じていることがわかる。そしてそれらは次の3つのタイプに分類できると考えられる。

（1）まず第1のタイプは農業専業者である。すでに述べたように，マンコンの農業は本来的に女性労働に依存していたのであるが，それは自給的農耕という文脈において成り立っていたといえる。しかしバメンダという都市社会は産業としての農業の

成立を可能にした。そしてそれはそれまでは主食生産の外縁にしかいなかったマンコンの男性の現金獲得手段ともなったのである。これはマンコンにおける新しい生業といえよう。

（2）第2のタイプは何らかのかたちの給料（サラリー）をとる男性である。給与生活者とでもいうべきであろうか。現在のマンコンで給与生活者といえば，行政機関につとめる役人か学校の教員か銀行をはじめとする各種企業の勤め人それに商店の店員などの仕事につく人である。そのうち学校の教員以外の職場はすべてバメンダに存在する。したがって彼らは毎日バメンダへの通勤を余儀なくされる。そのような需要があるのでバメンダのタクシーの多くが農村とバメンダを結んでいる。また自動二輪車の普及にもめざましいものがある。これはこれでマンコンにおける新しい職業とみてさしつかえない。

（3）第3は，性格づけがまことに困難なタイプである。これまで挙げてきた事例からもわかるように，職業というには社会的独立性が乏しく，またそれに生活時間の大部分を投入するわけでもない。あくまでも部分的なのである。しかしそれでいてある程度の固定性がみられ，仕事の取捨が自由というわけではない。筆者はその職業があくまでもフルタイムではなくパートタイムであることをふまえて，そのあり方に兼業という概念を使いたいと考えている。すなわち第1のタイプの農業専業者に対して，この第3のタイプは農業兼業者というわけである。マンコンの男性は基本的にはそれぞれの屋敷地内に畑をもちそれを経営しているのであるから農業者であることはまちがいない。ただ彼らはパートタイム的な仕事を兼業しているのである。それは仕事によって週に1度とかあるいはほぼ毎日とか，投入する時間のちがいはあるけれども，けっしてそれは専業ではないのである。わが国で兼業というと第一種，第二種という概念があるが，ここではどちらも含めて考えてよいと思われる。いまそれをも区分することの社会的意味はみあたらない。

女性の農業労働

マンコンの女性の農業労働についてはすでにふれておいたが，その労働は主食作物であるマカボとタロイモの栽培に集中している。草地におおわれた丘陵の斜面を開墾しウネを造成し，マカボ，タロイモを植え付け，除草を繰り返しながら収穫をまつ。1筆の焼畑の面積はさまざまであったが，筆者が調べたところでは，平均して3アール程度で，その広さの畑地に数条のウネがつくられているという形態であった［端1993］。

1人の成人女性は6筆から10筆程度のいろいろな段階の焼畑を経営しているのが一般的で，経営するいくつかの畑地をまわりながら農作業をおこなっているのである。

こうした農業労働はふつうは1人でおこなわれている。男性はこの焼畑の農作業にはまったく参加しない。また普段は共同で作業することもないという。しかしひとつだけ女性が共同でおこなう農作業がある。それは草地を開墾して新しいウネをつくる作業である。つまり焼畑の耕作過程としては新畑の造成にあたる作業である。この女性だけの共同労働はイシエ（ishie）とよばれており，通常は4人から8人程度の女性のあいだでおこなわれる。このメンバーは固定しているのではなく，畑地の近いもののあいだでおこなわれるという。したがって畑地が遠くに分散していればそれぞれのところでイシエがおこなわれることになる。そして原則として共同労働における労働の交換は互酬的になっているので，労働の貸借関係はそうとう複雑になっている。このことを考えると，丘陵で展開する焼畑の経営は，マンコンにおける女性の労働交換のネットワークによって成り立っているといえるのである。

こうしてマンコンの女性は自給経済の部分を支えている。しかしこうしたマンコンの女性もまったく貨幣経済にふれないわけではない。自分の畑で収穫したイモを週に1度マンコンで開かれる市場にならべたり，ときにはバメンダの市場にでかけてマニオクからつくったデンプン粉を売りにゆく。そうしてつくった現金で鍋などのうつわを買うのである。しかしこのような農産物やその加工品を売る程度で得られる現金の額は大きいものにはならない。その意味ではマンコンの一般的女性の現金生活は乏しいといわざるをえない。

しかし近年ではマンコンの女性のあいだでも現金をめぐって大きな変化がみられる。それはとくに夫が給与生活者である場合である。役人であれ学校の教員であれ，夫が給与生活者になるとマンコンの女性の生活は大きく変化する。いちばん大きな変化は焼畑農業からの脱落である。主食作物の栽培から家庭婦人になるのである。おしなべてこのような変化がみられたのは興味深いことである。夫が給料をとると妻が家庭の主婦になるというのはどういう原理から生まれてくるのだろうか。

このような家庭では当然主食のイモの生産がないので買ってくる必要が生じてくる。そのためにわざわざバメンダまでゆくこともなく，マンコンで開かれる市場や近隣の女性から買うことになる。このような生活様式をはじめるとこの女性はもはや消費者という新しい価値をマンコン社会に持ち込むことになる。すでにそれははじまっているのである。

第4章　交換の諸体系

交換の種類

マンコン社会にはさまざまな交換がみられる。日常生活において，何気ない交換が頻繁におこなわれる。これはどのような人間社会にもかわるところがない。通りすがりの人が求めれば貯えてあるヤシ酒や飲み水を提供し，ちょっとした手助けもまたいろいろな場面でみられる。こうしたごく日常的な交換をすべてとりあつかうことは不可能である。ここでは組織だった制度的な交換に限定して報告することにする。

イシエという女性だけの労働交換についてはすでにふれておいた。これはまたイシエ・ファ（ishie-fa）ともよばれる，丘陵部の草地の開墾のときにのみおこなわれる労働交換である。ファというのは，手ぐわをもちいておこなう草地の開墾作業の意味で，開墾や除草など耕作作業全般をも意味する。乾期も深まった12月，1月，2月にはマンコンの丘陵のあちらこちらで数人の女性が開墾作業をおこなっている光景に出くわす。草地を根の部分から掘り起こし，それを数カ所に集める。その草は数日間から長いときは3週間ほどそのまま放置され乾燥させる。しかるのちそのうえから土をかぶせ，すっかり土でおおったあと両端から草に火をつけるのである [端　1993]。共同作業をおこなうのは前半の開墾作業であって，草を乾燥させたあとウネをつくるのはその畑を経営する女性が1人でおこなう。

このイシエという労働交換は，主食作物生産というこの社会でもっとも重要な生産労働と結びついている。さらにはその生産労働のなかでも新畑の造成というもっとも労力を要する場面で共同労働が組織されているのである。

このような女性社会のみの労働交換とは別に，マンコン社会にはおもに労働交換を目的としたンゴータ（ngoota）ないしはングン（ngun）とよばれている制度と，かならず何らかの財の交換をおこなうことを目的としたンチュア（nchua）という組織がある。後者は労働の交換をおこなう例もあるがそれが目的なのではない。

ンゴータないしングンは，共同体的労働交換とでもいうべきもので，共同労働の必要が生じたとき地域内の人にひろくよびかけておこなうのもので，あらかじめメンバーは決まってはいない。労働の依頼主はアチュウという伝統食とヤシ酒を準備しておき，労働の提供者にふるまう。

これに対してンチュアの特色は，まずあらかじめメンバーが決まっていること，そ

れが定期的に集まりをもち，その集会ごとにあらかじめ決めた額の財（現在では現金）を持ち寄ること，そしてその持ち寄った金額を集め，順番にメンバーが使ったり1年のおわりに分配したりするものである。これはわが国の頼母子講を想起させる組織である。

マンコン社会における制度的な交換の諸体系を概観すると以上のようになる。そこには大きくは労働をめぐる交換の体系と財の交換をめぐる体系とがある。以下においては，それらの実態を述べることにする。

労働の交換

イシエについてはすでに述べたのでここでは繰りかえさない。ただマンコン社会におけるもっとも重要な労働交換の制度のひとつであることを指摘するにとどめる。

ンゴータはしばしばンゴータ・ファ（ngoota-fa）ともいわれる。つまりンゴータにおいてもイシエと同様に交換の対象は耕作労働なのである。しかしすでに主食作物を作付けする丘陵部の焼畑の開墾については，女性のあいだだけの交換制度イシエがある。人々の説明ではンゴータはイシエよりもっと一般的な農作業労働をさすのだという。

イシエのおこなわれる焼畑以外の畑地といえば各戸の屋敷地の畑地である。筆者が観察しえたンゴータの事例はわずか1例だけであったが，それはその屋敷の戸主が軍役について5年ほど屋敷をあけており，その間に屋敷内の畑地が荒れてしまったのでンゴータを頼んだというものであった。その日は近隣の人々に声をかけ，成人男女13人が集まった。作業は放置されていたプランテインやコーヒーの樹をふくめて雑草・雑木の除去からはじめ，そのあとはプランテインの株植えをおこなった。作業は朝8時ごろからはじまり午後の3時ごろには終了した。そのあと作業に加わった人々は屋敷内の一室に集まり，戸主からのアチュウやヤシ酒のふるまいを受けた。このときはビールもふるまわれた。

こうしたンゴータによる労働交換は現在のマンコンではほとんどみられないといってよい。その要因はいろいろであるが，もっとも大きな原因は人々が集まらなくなったからだという。すでにみたようマンコンにおいては女性は丘陵の焼畑での労働が中心であり，男性はそれぞれ自分の現金を得るための生業に忙しい。もちろん給与生活者は週日は参加できない。マンコンにおける生活構造の現代化そのことがンゴータのような共同体的な労働交換の成立を困難にしているのである。

このことと関連して次のふたつの点を指摘しておかねばならない。そのひとつはン

ゴータにかわって賃労働による農作業がみとめられる点である。筆者が観察しえた範囲では，現在のマンコンではンゴータを必要とする規模の農作業にはしばしば女性を対象とした賃労働がおこなわれていた。もっともよくみられたのはヤムイモの畑である。ヤムイモを商品作物として大量に栽培する場合は土地の開墾からウネづくりまでそうとう量の労働を必要とする。この作業はンゴータを必要とする規模であるが，実際には数人の女性を賃労働で雇っておこなっていた。このような例がいくつかみられた。ンゴータを必要とする農作業の目的も変化していることがわかる。

現在のマンコンでンゴータを必要とする農作業は屋敷内の畑地における農作業だと考えられるが，実際にはンゴータではなくてのちに述べるンチュアによる労働交換が一般的である。すなわちあらかじめ決まったメンバーによる労働交換である。すでにみたように屋敷内の畑地ではプランテインとコーヒーがおもに栽培されており，これらは多年生の樹木であるので日常的な農作業はそれほど多くはない。ここではンゴータは必要ないのである。ンチュアの原理についてはのちに述べる。

さてマンコンの農民社会における労働交換のなかでいまひとつ注目されるのはングンとよばれる労働交換である。ンゴータはンゴータ・ファとよばれたように農業労働を目的としたものであったが，ングンは住居に限定された労働交換を目的としている。ングン・エビン（ngun-ebin）はいわゆる屋根葺きにあたる労働であり，ングン・ンダ（ngun-nda）は家づくりである。

マンコンにおける伝統的な家づくりでは，円形の壁面となる部分はラフィアヤシの幹を矢来格子状に組み，その外面に壁土を塗り付ける方法でつくられていた。そしてその上部にはエレファントグラスで葺いた円錐形の屋根をのせるというものであった。現在ではこのタイプの住居はほとんどみられなくなっている。この伝統的な住居づくりにおいて，共同体的な労働交換が発達していたようである。数百本というラフィアヤシを組み立て，それに壁土を塗る作業，大量のエレファントグラスを刈り集めそれで屋根をつくり壁の上部にのせる作業，そのいずれもが村人の共同作業によっておこなわれたという。

現在ではマンコンの住居は大きく変化している。住居は方形となり，壁は日干しレンガを積み上げそのうえから壁土をぬったり，セメントを塗ってかためたりする。屋根にはトタン板が使われるようになってきている。このような家づくりではほとんど共同作業が必要でなくなっている。日干しレンガづくりは戸主が1人でおこなっている例が多く手伝いがあってもせいぜい家族内の手伝いである。またレンガ積みやトタン屋根葺きにおいては専門の者がよばれることが多くなっている。

ここでも伝統的な住居が変わってしまったので，労働交換の必要性が薄れてしまっているようである。こうしてみると，労働交換については，農作業の目的の経済的意味や伝統的な住居の形態が変化したために，伝統的な交換の体系の社会的価値が弱まってきていることが指摘できる。現在のマンコン社会においてもっとも大きな価値を有している労働交換は女性のあいだでのみおこなわれるイシエであるといえる。このイシエには，主食作物の生産というこの社会の自給性の根幹にかかわる価値が認められるのである。

ンチュア組織における交換の意味

ンチュアによる交換は任意のメンバー間でおこなわれる。規模の大小はさまざまであるが，いずれにせよあらかじめメンバーが決まっているのである。筆者が調べた範囲では，人数が数人というものから60人をこすものまでみられた。

ンチュアはこの決められたメンバーのなかで必ず財の交換をともなう。そのため組織は財の管理をめぐって制度化されている。マンコンの村落部に限定すると，まず代表となる者が財の規模，人数の規模，集会の目的や回数などをあらかじめ決め，参加者を募るのである。たとえば村落部で多いのは，週に1度の集会で，そのときには1人当たり500フラン（現在約250円に相当）を持ち寄る，集会にはヤシ酒を用意しダンスをおこなう，人数は30人から50人，というものである。これでンチュアが成り立つと，最初の集会のときに代表と会計が決められる。たいていは発議者が代表となっている。

マンコンの村落部だけでもこのようなンチュアは無数にあり，1人の人間がいくつにも参加しており，筆者が聞いただけでも女性もふくめて1人の最低は3つであった。もちろんこの3つのンチュアは目的も金額もちがうのであった。

そこでまずンチュアの目的であるが，よくみられるのは次の4つであった。

第1は農作業の労働交換を目的にするものである。すでに前項でふれたように，おもに男性の管理にまかされている屋敷地内のコーヒー畑での労働はこのンチュアによる労働交換でまかなわれているのである。この場合のンチュアの平均人数は10人前後で女性も混じることがある。たいていは週に1度，決めた曜日に集会をおこなう。集会はメンバーの屋敷地を順にまわっておこなわれる。つまりこのンチュアは労働交換が目的なので，メンバーの屋敷地をまわってそれぞれの屋敷地のコーヒー畑の除草をおこなうのである。農作業が終わると，食事やヤシ酒がでる集会となる。このタイプのンチュアでは1000フラン以上の現金が持ち寄られることはない。現金の交換が主目

的ではないからである。しかし他のンチュアと同じように，毎回現金を持ち寄り会計がそれを記録し代表がそれを預かるという形態は変わらない。このタイプのンチュアはとくにンチュア・ファ（nchua-fa）とよばれることもある。

ンチュアの目的で第2によくみられるのは，ダンスである。これはンチュア・ンダーモ（nchua-ndaamo）とよばれる。名称のとおりダンスのンチュアという意味である。このンチュアは1週間か2週間に1度集会がもたれ，食事が用意されてヤシ酒がふるまわれ，ダンスがおこなわれる。したがって集会は夕方からかもしくは夜になっておこなわれることが多い。人数も多いケースがみられる。たいていは30人以上である。そしてこのンチュアでは現金の持ち寄りによる財の交換も主目的になっている。30人で1人1000フラン持ち寄れば，1回で動く金額は30000フランである。30000フランを使う権利を手にいれれば結婚の際の婚資の一部にはなるし，子供の学資や薬代などまとまった支出は可能である。ダンスや寄り合いの楽しみに頼母子が加わるのでこのンチュアはマンコンの人々の経済生活においては重要な意味をもつ。

ンチュアの第3の目的は，仮面ダンスである。この仮面ダンスを目的とするンチュアは，ンチュア・コム（nchua-kom）とよばれる。他のンチュアほどではないが，マンコン社会の近隣地区にはたいていひとつの仮面のンチュアがある。そして人々はこれに参加する。この場合は仮面およびその装束を所有するものがンチュアの代表となる。そしてこれに仮面をつけてダンスをする者と楽器を演奏する者，はやしたり歌ったりまたダンスをしたりする者が加わる。このンチュアのメンバーは仮面結社の性格上，男性に限られている。それでも人数は50から60人ほどになることも稀ではない。

ンチュアの目的に仮面ダンスがあるのはこの地方の仮面をめぐる慣習とふかくかかわっている。仮面をめぐる問題についてはこれまでにもいくつか報告をしてきたので[端　1980b, 1981, 1989, 1990]，ここではンチュアとのかかわりにおいて略述する。マンコンでは家に死者がでるとその家で7日間の埋葬儀礼をおこなうのが一般的である。死者そのものは屋敷地の一角に埋葬する。近年ではキリスト教的な墓碑をつくる慣習が広まってきたが，ほんらいは畑地の一部に深さ1.5メートルほどの穴を掘りそこに死体を埋葬し，とくに墓碑などは立てなかった。7日間の埋葬儀礼は人々の弔問にはじまり，女性のダンス，男性のダンス，参加していたンチュアのメンバーのダンスなどがあり，5日目か6日目には仮面ダンスがおこなわれる。死者の埋葬儀礼に仮面ダンスがおこなわれるかどうかは，死者やその家族が仮面ダンスのンチュアに参加しているかどうかによるのである。

その家族が大きくて家族のメンバーがそれぞれに（マンコンとはかぎらずひろくカ

メルーン高地地方で）仮面のンチュアに参加していれば埋葬儀礼にはたくさんの仮面ダンスがおこなわれることになる。それがその家族の名誉になるというばかりでなく，死者の霊も幸福のうちにカミになるという。すでに述べたようにマンコン社会では祖先崇拝の観念があり，死者の霊は祖霊として畏れられている。その祖霊をカミに導くのが仮面ダンスの役割というのである。したがって仮面ダンスのない埋葬儀礼はマンコンの人々にとっては屈辱的なことであるという。

そのために人々は仮面のンチュアに参加する。そしてここでも現金が持ち寄られるが，その現金はしばしば仮面や装束を新調したりする資金となる。仮面ダンスはみすぼらしいものであってはならないという。普段の決められた集会のときには他のンチュアと同じように食事やヤシ酒がふるまわれダンスがおこなわれる。ときには仮面の装束の修理やダンスの練習がおこなわれることもある。人々はンチュアを通じて仮面を社会化しているのである。

第4のンチュアの目的は現金の融通である。これにはとくに名称はない。ただンチュアとよんでいる。現金の融通を目的とするこのンチュアは，わが国の頼母子講ときわめてよくにている[9]。ただマンコンの場合は毎回の持ち寄りに際して利子をつけて競り落としをおこなうという制度はみられなかった。このンチュアの第4の目的となっているのは，あくまでも個人の経済生活の欲求にしたがったまとまった現金の利用である。したがってこの場合はメンバーの経済力の均質度が問われることとなる。すでに述べたようにマンコンの男性は現金を得るために何らかの職業についているのであるが，たとえば毎週10000フランを持ち寄る男性はそれほど多くはない。したがってその能力をもつ者どおしが集いあってンチュアをつくることになる。毎週5000フランならできるという者が集まってやはりンチュアをつくる。こうなるので経済力の均質度がンチュアをつくる重要な原理になるのである。

毎週10000フランを持ち寄るンチュアの例ではメンバーは6人であった。代表は手びろく行商を職業としている男性で，残りの5人は産科保健センターの薬剤師をして村内にビールを飲ませる店を経営している者やバメンダの役所につとめながら村内に雑貨店を経営している者やバメンダで商店を経営している者などであった。このメンバーは6週間に1度，60000フランを使う権利をもつことになる。彼らはまとまったそれらを原資本としてそれぞれの事業に投資していた。彼らの集会は順番にメンバーの家をまわっており，持ち寄り金を使う権利をもつ者のイエで集会がおこなわれ，そのときはその者から食事やヤシ酒，ビールなどが振る舞われていた。この場合はこう

9）カメルーン高地のバムン族については和崎春日の報告 [1984] がある。

した食事や酒の準備の費用が利子の支払にあたっていると考えられる。

村内で高額なのは毎週5000フラン程度が限度のようであった。このタイプのンチュアには女性はほとんど参加しない。例外なのは産科保健センターの看護婦や小学校の教諭の女性である。いずれにせよ彼らが給与生活者であることが注目される。給与生活者は現金を手にいれるので,こうした比較的高額のンチュアに参加する傾向が強い。また彼らは職場でも仲間でンチュアをおこなう。彼らのンチュアは頼母子講のようにまさしく現金の融通を目的としておこなわれていた。

さてここでンチュアにおける財の交換をまとめておく。現在のマンコンでみられるンチュアで交換される財は現金である。決められた集会の度ごとに決められた額の現金を用意して持ち寄る。マンコンの人々の現金収入は不安定なので2，3週間パスしてまとめてもってくる例も多い。こうして持ち寄られた現金はそのまま貯めていって，たとえば1年後にメンバーで分配する場合と持ち寄った金額をメンバーが順に使っていく場合とがある。前者の場合は代表が集まった金額をバメンダの銀行に預金していくのである。1年後には銀行からの利子がつくので，メンバーで分配するときには少しのおまけがついているのである。あるいはそのおまけの金額がビールなどにかわるケースもある。したがって現代のンチュアは現金を中心にして都市の銀行が貯蓄の場として使われるなど，現代の貨幣経済と直接的に結びついているといえる。

最後にこのようなンチュアの伝統的な形態についてふれておく。

現代のようなかたちになる前からンチュアはおこなわれていたという。植民地化がはじまってもおこなわれていたというから1920年ごろまではおこなわれていたようである。その当時のンチュアでは鉄の棒をコイル状に曲げて腕輪の形態にしたンデン（ndeng）という貨幣を使っていたという。そしてその貨幣は結婚の約束の際の婚資として使用されていた。それがいつのまにか現金を使用する現代のような形態に変化してきたのである。このことを考えるとンチュアをはじめとするマンコン社会の交換の諸体系は人々の生活のあり方とともに大きく変化してきたことが明らかとなる。

むすびにかえて

世帯はいうまでもなく社会の最小の経済単位である。社会の経済のあり様は世帯構造に反映される。マンコンにおいてもそれは例外ではない。

浸透する貨幣経済の環境に適応する農民層の生業分化はマンコンの世帯構造に変化をもたらしたようである。もともと主食作物の生産にはたずさわらなかった男性は，

貨幣経済社会をむかえて現金獲得手段を求めた。世帯内分業の観点からいえば，女性が主食作物の供給を担当し，男性が現金獲得を担当したといえる。そして男性は現金を求めてさまざまな職業につき，その結果，生業分化が起こった。それは大きくは3つのタイプに分類できた。第1は商品作物を生産する（1）専業農業者，第2はサラリーを得る（2）給与生活者，第3はさまざまなパートタイム型の職業につく（3）兼業農業者である。

こうした男性の変化にくらべると女性の役割には大きな変化はみられない。すなわち主食作物を供給するという機能，それにともなう日常的農作業や労働交換のネットワークなどはほぼ伝統的なシステムを維持しつつおこなわれている。この場合，直接的な現金の獲得や消費はきわめて小さな額に限定されているようである。

しかしながら夫が給与生活者のタイプに属する世帯では，妻である女性は伝統的な農作業に従事しなくなる傾向がみられた。給与生活者になるには事務能力や技術能力が必要なので，その年代はほぼ40才以下が多かった。女性の年齢も同様であったので，給与生活者の妻が伝統的な農作業をしなくなる背景には年代層が関係しているかも知れない。いずれにしろそうした妻は住居を中心に1日を過ごすようになり，育児に多くの時間をかける傾向にある。また夫が開いた雑貨店の店番をしたり，ミシンを使って裁縫をしたりして，小金を扱うケースもみられた。いずれにしろこの現象はマンコンにおいてはひとつの変化といわざるをえない。

こうしてみると，マンコンの男性はその新しい生業において3つのタイプに分化してきており，女性は一部に新しいタイプが生まれつつあるといえる。この女性の新しいタイプをカメルーンの国勢調査にならって（4）家庭主婦（house wife）とよんでおく[10]。これに対して伝統的な農作業に従事する女性を（5）伝統農耕者とよぶことにする。男性の3つのタイプに対して，女性においては2つのタイプが認められた。したがって現在のマンコン社会では，これらの5つのタイプが世帯構造を構成しているといえる。

男女が構成する世帯からいえば，（1）（2）（3）と（4）（5）の組み合わせによって世帯構造の分類が可能になる。組み合わせの可能性は6とおりあるが，現実にはたとえば（4）は（2）のみと対応するので世帯構造は6とおりは存在しない。

人口的にもっとも多く，マンコンにおいて一般的といえるのは（3）＝（5）の組み合わせである。すなわち兼業農業者の男性と伝統農耕者の女性の組み合わせによる世

10) General Census of Population and Housing (Decree No. 73/757 of 6 December 1973), Ministry of Economic Affairs and Planning, United Republic of Cameroon.

帯である。女性が主食作物の生産をささえ，男性はあくまでもパートタイム型の職業につくことによって現金を獲得する手段をもつという世帯である。変化に対しては保守的な態度をもつタイプと考えられるが，社会全体の変化をゆるやかなものにしているのは数のうえでもっとも多いこのタイプの世帯であろう。

これに対して，（1）の専業農業者や（2）の給与生活者の男性は現在のところ少数派であるので，彼らが構成する世帯数そのものもまだ多くはない。しかしこのふたつのタイプを比較すると絶対数は現在のところ（2）のほうが多い。マンコン領内に小学校が数校あり中学校も1校ある。また産科保健センターがもうけられており，教員やそれらの勤務者も給与生活者であり，それにバメンダへ通勤する者が加わるので，その数は予想以上に多いといえよう。

この（2）のタイプと女性の（4）と（5）との組み合わせによる世帯がある。一夫多妻の婚姻制度をもつマンコンでは，（2）のタイプの男性が同時に（4）と（5）のタイプの女性と世帯をもつ例がみられる。つまり給与生活者の男性が伝統農耕者の女性と世帯を構成し，いっぽうで（4）のタイプの女性とも世帯をもつのである。ただしこの場合，世帯は別々にいとなまれる。総数としては（2）＝（4）という世帯のほうが多い。

（1）の男性は人数的に少なく，したがって世帯も少ないが，（1）の男性は（5）の女性との組み合わせによる世帯を構成している。これはこの世帯の農業的活動からいえば当然かも知れない。

以上を人口の多い順にならべてみると，

まず　（3）＝（5）

次いで（2）＝（4）

そして（1）＝（5），（2）＝（5）

となる。

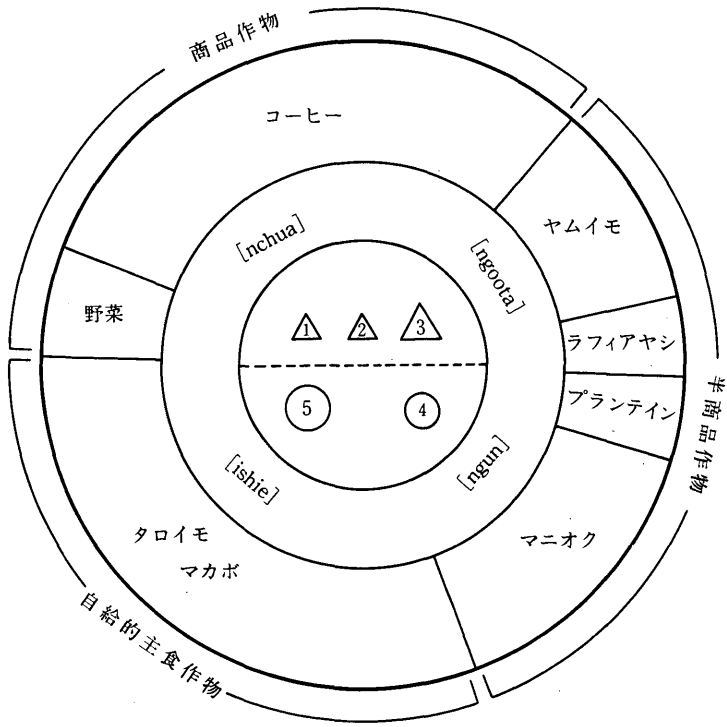
焼畑農耕に依存する自給的社会であったマンコンは，バメンダの形成を通じて西欧近代の原理を受け入れそれへの適応をはかってきた。ほぼ100年間の社会の変化のメカニズムはその世帯構造の変容にあらわれているといえよう。

しかしこの世帯構造は変化の主体としてそれ自身の自己運動として変化してきたのではない。この主体が変化する過程において明らかに交換のさまざまな体系も変化してきた。交換の諸体系は主体としての世帯構造の変化を補完するかのように変化してきた。ここにおいてマンコンの社会経済的変化のメカニズムが明らかとなる。すなわち変化の主体である世帯構造をめぐって，異体系としての西欧近代とのあいだに，中

間的体系としての交換があり，このふたつの相互補完的な変化こそ社会経済的変化のメカニズムといえるのである。これらを図式化したのが図2である。

バメンダという異体系をその領域内に組み込んだマンコンの農民社会は，交換という中間的な体系に補完されつつ，変化の主体としての世帯構造を変化させていったのである。

このような変化のメカニズムが明らかになるいっぽうで，自給的な焼畑農耕社会の経済的源泉とは何かという問題にゆきあたる。これまで述べてきたようなマンコン社会の変化，農民の経済生活や世帯構造の変化は王制と何ら関係がないようにもみうけられる。はたしてそうなのだろうか。農民の経済生活がより自給的な社会における王



〈男性の生業〉
1 専業農業者
2 給与生活者
3 兼業農業者

〈女性の生業〉
4 家庭主婦
5 伝統農業者

図2　世帯構造，交換の諸形態と農産物の商品化

制は現在の王制と本質的に変わっていないのだろうか。やはりこの問題はきわめて重要である。

焼畑農耕民の社会経済的変容と王制社会とのかかわりについては，別に稿をあらためて論じるが，ここでは本稿を終えるにあたっての若干の見通しを述べておく。

本稿では土地の権利についてまったくふれてこなかったが，ドゥル農民の社会との大きな相違はこの点にある。ドゥル族の社会にあっては土地の所有や利用に関する何らの規制もみいだしえなかった。しかしこのマンコン王制社会では同じ焼畑農民でありながら，はっきりした土地に関する規制がある。領域内の土地はすべて潜在的には王の所有である。潜在的という表現は現代的状況のなかで生じた概念であり，それは本来的とか原初的とかいわねばならないのかも知れない。現在でも土地は王のものという意識は生きており，王の命令によって土地はいかようにでも収奪されるとのことであったが，現実はそうではない。現実の土地の占有的所有はクラン組織に認められている。マンコンの女性達が新畑を開墾するときに，利用する許可を得なければならないのは，現在ではクランの長に対してである。

王は農民に対して労働の徴発権を現在も有しているので，自ら広い面積の農地を経営する。どの土地を使用するかはもちろん王の意志にまかされている。したがってロイヤル・クランの占有する土地というものはない。しかし現在ではマンコンの領土全域にわたってクランの土地占有がゆきわたっているので，現実に王が自由にできる土地は限定されてきており，いまや王の土地に対する権利は潜在的所有といわざるをえなくなってきている。

さらに現在では土地の売買が各所でおこなわれるようになってきている。いまのところ売買される土地は，屋敷地として利用される場合である。屋敷地を継承したりあらたに設立したりすることはすべて王のもとで許可を得る制度になっているので，土地の売買も王の承認が必要となる。本来なら王の承認のみが社会的慣行なのであるが，いまや屋敷地の設立に必要な土地を現金で求めざるをえないところに，すでに王の絶対的土地所有権が崩壊していることがうかがえる。

いま土地についてのみ述べたが，原初的にはこのような王制はクラン組織の原理にもとづく家産制社会の構造をもっていたと考えられる。現代では王はあたかも大土地農園主のような存在に変わりつつある。別稿で明らかにしたいと考えるが，王権をめぐるさまざまな儀礼的文化はいまや王権の装飾的意味が強くなってきているようにみうけられる。おそらく農民の経済生活が自給性の強い姿から現在の姿へ変化するいっぽうで，王制社会はその家産制社会の構造から自立的経営複合体へと変化をとげつつ

あるのではあるまいか。これらの問題について，稿をあらためて論じることにしたい。

付　　記

本稿は，1978年以来の数次にわたる文部省科学研究費補助金（海外学術調査・代表；和田正平）の助成をうけて実施した現地調査「熱帯アフリカにおける物質文化の比較民族誌的調査」および「アフリカ諸社会における女性の比較研究」の成果の一部である。また，本稿をまとめるにあたり，国立民族学博物館の共同研究「諸民族における経済機構の比較民族学的研究（代表；端 信行）」における討論から多くの示唆にとんだ教示をえた。

文　　献

ANKERMANN, B.
1911 Religion der Grassland Bewohner Nordwest Kameruns'. *Correspondenzblatt der Deutschen Gesellshaft für Anthropologie*, Berlin.

CHILVER, E. M. and P. M. KABERRY
1968 *Traditional Bamenda, The Pre-Colonial History and Ethnography of the Bamenda Grassfields*. Buea.

端　信行
1976 「ドゥル族の季節観と農作業暦」『国立民族学博物館研究報告』 1 (3): 537–564。
1978 「ドゥル族の村落社会——アフリカ農村社会学序章」加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫編『探検・地理・民族誌』中央公論社, pp. 429–451。
1980a 「北カメルーン，ドゥル族社会における貨幣経済化について——労働交換とモロコシ酒をめぐって」『アフリカ研究』19: 11–20。
1980b 「仮面の王国——カメルーン高地・マンコン」『季刊民族学』 4 (1): 38–49。
1981 「アフリカ仮面の世界」『日本美術工芸』518: 15–21。
1982 「ヤムイモ文化のフルコース」梅棹忠夫監修　石毛直道責任編集『世界旅行——民族の暮らし　2 食べる飲む』日本交通公社, pp. 111–117。
1986 「カメルーン高地の散居制——マンコン社会を中心に——」『人文地理学の視圏』大明堂, pp. 507–516。
1989 「王の仮面」『民族藝術』 5: 57–67。
1990 「仮面の民族誌 IVカメルーン高地　王制と秘密結社」梅棹忠夫監修　端　信行・吉田憲司編『赤道アフリカの仮面』（図録）国立民族学博物館, pp. 96–101。
1993 「バメンダ高地のグラスファロー・システム」佐々木高明編『農耕の技術と文化』集英社（印刷中）。

KABERRY, P. M.
1952 *Women of the Grassfields*. London.

KODJO, F.B.B.
n.d. *Notes on Bafut Beagles*. Victoria.

MURDOCK, G. P.
1959 *Africa, Its Peoples and Their Culture History*. New York.

NKWI, P. N.
1987 *Traditional Diplomacy, A Study of Inter-Chiefdom Relations in the Western Grassfields, Northwest Province of Cameroon*. Yaoundé.

RITZENTHALER, R. and P.
1962 *Cameroon Village, An Ethnography of the Bafut*. Milwaukee.

SOH, B. P.

1983 *Abakpa-Mankon-Bamenda, Creation and Evolution of an Urban Center in a Traditional Milieu.* Yaoundé.

WARNIER, J.-P.

1975 *Pre-Colonial Mankon: The Development of a Cameroon Chiefdom in Its Regional Setting.* PH. D. Dessertation, Pennsylvania: Univ. of Pennsylvania.

和崎春日

1980 「バムン族の王権と村落支配——集落関係をめぐる政治組織」富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開——地域・都市・言語』同朋舎。

1984 「バムン族の経済互助結社——カメルーン西部地域にみられる頼母子講ブオムシャ＝ヴァー」『アフリカ研究』24: 22–41。